宮城教育大学附属図書館　児童図書リーフレット

カムパネルラ

～カムパネルラとは～
宮沢賢治の『銀河鉄道の夜』でジョバンニと旅をする友人なのは言うまでもありません。絵本が開く異世界への道案内人としての意味を込めたものです。

Vol.2　　2008 年 1 月号

■ 絵本と子ども観・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・伊藤　順子
■ 絵本のなかに降る雨は…・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・藤田　博
■ 将来、自分で調理する時に・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・庄子　博之
■ 絵本を読んで英語で表現する授業・・・・・・・・・・・・・・・・佐藤　倫子
■ 暖かい心の届くこの一冊・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・佐藤　葵
■ 新刊紹介・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・藤田　博

■　絵本と子ども観

伊藤　順子

絵本はいろいろなメッセージを持っていて，同じ絵本でも異なった「ねらい」で子どもたちに読み聞かせすることができます。読み聞かせながら，絵と文の間をくぐりぬけ，子どもたちへいかに語りかけるか。そこには，それぞれの話者の子ども観が反映されていてとても興味深いものです。そこで，幼稚園の教育実習中に使用した「絵本」で保育実践を再現してもらい，それぞれの学生さんの子ども観を覗いてみることにしました。

「どうぞのいす」　作／片山美子　絵／柿本幸造

4 歳児（年中）クラスで読み聞かせをした絵本です。うさぎさんは「どうぞ　の　いす」という立て札と椅子を作りました。どうぞの椅子にやってきたろばさんは，拾ってきたドングリが入ったかごを椅子において，お昼寝をし始めました。そこへ，くまさん，きつねさん，りすさんが次々にやって来て，どうぞの椅子に置かれたかごの食べ物を食べてしまいます。でも，食べた後，みんな「からっぽにしてしまっては　あとの　ひとに　おきのどく」と，自分の持っていた食べ物を替わりにかごに入れていきます。お昼寝から目覚めたろばさんは，かごの中の栗を見て「どんぐりって　くりの　あかちゃんだった　かしら」と驚くという話です。学生さんは，「次に誰がくるかわからないのに，その人のことを気遣って食べ物を残しておく」というさりげない優しさに感動し，子どもたちにこうした気持ちを育んで欲しいという願いからこのお話を読み聞かせたようです。

「はらぺこあおむし」　作／エリック＝カール　訳／もりひさし

5 歳児（年長）クラスで読み書かせをした絵本です。この絵本では，卵→幼虫→さなぎ→蝶という変態を経て美しい蝶が誕生するまでが，美しいグラフィックアートによって描かれています。学生さんは，子どもの知覚に興味があり，「子どもたちは，大人のように視覚的に正しい眺めを表現するのではなく，描く対象について知っていることを描く（知的リアリズム）」という子ども観を持っています。学生さんは，生物学的知識を色彩豊かな画面とその展開によって伝えることができる「はらぺこあおむし」という絵本を選び，子どもたちの知的リアリズムを育みたかったようです。

※「どうぞのいす」片山美子作／柿本幸三絵／チャイルド本社
※「はらぺこあおむし」エリック＝カール作／もりひさし訳／偕成社

（幼児教育講座）

■　絵本のなかに降る雨は・・・

藤田　　博

晴れと雨とどっちがいいと聞かれれば、大半の人が晴れと答えるのではないでしょうか。雨が降ることでもうかるような仕事をしている人は別にして。それが晴れを雨に優先させて考える結果を生み出しています。「きょうは天気がいい」という言い方に表れているものです。ニュートラルであるはずの「天気」が、晴れの意味だけに使われているのです。大人の世界での考えがそうなら、大人の（ひとまずそう言っておきます）文学での雨は、決まって重く、陰鬱です。ヘミングウェイの『武器よさらば』に降る雨、モームの『雨』に降りつづける雨、ハーディの『テス』で、テスに濡れかかる雨また然りです。

子どもの世界でなら違います。雨を心待ちにする気持ちがあふれているのです。初めてのかさをさし、初めての長ぐつをはいてとなればなおのことそう。やしまたろう『あまがさ』（福音館書店）では、モモが雨の日を待ちこがれています。ようやくやってきた雨の日、もものかさにあたる雨は「ぽんぽろ　ぽんぽろ　ぼろぼろ　ぽんぽろ」と音を奏でます。町の様子がいつもと違って見えてきます。大きくなったモモは「その日」を忘れてしまっています。しかし、忘れているのではないのです。体の奥深く眠っているのです。「おぼえていても　いなくても、これは、モモが　うまれて　はじめて　あまがさを　さした　ひだったのです。」それだけ大事な思い出となっているのです。ピーター・スピアー『雨、あめ』（評論社）は、晴れた日には見られないこと、経験できないことにあふれています。そこには発見があり、驚きがあります。次の日の朝、子どもたちの寝室のカーテンのすき間から日の光が射し込みます。雨の日があって晴れの日が、特別の意味を持つのです。

雨とは何でしょうか。雨に当たれば誰もが濡れます、王様も乞食もです。雨は水平の世界をつくり出すもの。雨宿りが出会いの場を生み出すものなのは、雨の持つその力によります。そこからかさの下の世界、雨のなか、かさの下に広がる別世界までは一歩です。同じ高さに二つが並べば、それが反転、ひっくり返しのきっかけとなることも明らかです。井上ひさしの芝居『雨』が、雨の降る両国橋の下から始まるのはそのためです。橋と雨とが、拾い屋の徳の前に開かれた天国と地獄の分かれ道を象徴的に示しているのです。

岡野かおる子『ミドリがひろったふしぎなかさ』（童心社）のミドリは、水玉のかさを拾います。「かさを　さした　とたん、ぱあーっと、あかるい　ひが　てりました。」その「かさの　下だと、なんでも　おもいどおりになる」のです。ミドリはかさの持ち主の女の子に出会います。「雨の　日に、いつも　おんなのこと　いっしょに　いた　かさは、おんなのこが　かさの　下でかんがえた　ことを、よく　おぼえていたに　ちがいありません。」かさの下、ミドリの思いと女の子の思いが一つになるのです。ガブリエル・バンサン『雨の日のピクニック』（ＢＬ出版）では、くまのアーネストとねずみのセレスティーヌが、どしゃぶりの雨のなかピクニックに出かけます。「きょうは　とても　いいてんきだっていう　つもりに　なるのさ」と考えてのピクニックにです。「きみ、なんで　こどもじみた　あそびを　やるんだね」と声をかけてきたおじさん、その立派なお屋敷に招待されるという、思いがけないことが待っています。それもまた雨がもたらす「さかさま」がつくり出したものと言えます。

雨が降ってもかさをささないおじさんがいます。「すこしくらいのあめは、ぬれたまま　あるきました。かさが　ぬれるからです。」「もうすこしたくさん　あめが　ふると、あまやどりして、あめが　やむまで　まちました。かさが　ぬれるからです。」そのおじさんが、雨が降ったらかさをさす楽しさを子どもに教わるのです。「あめが　ふったら　ポンポロロン　あめが　ふったら　ピッチャンチャン」、おじさんがかさをさしたのです。さのようこ『おじさんのかさ』（講談社）には、「さかさま」があり「初めて」があります。その二つにこだわるおじさんが限りなく子どもに思えてきます。雨をどう見るかは大人と子どもを分けるバロメーター、子どもの心をどのくらい残しているかを測るバロメーターなのです。

※「あまがさ」八島太郎文・絵／福音館書店　　「おじさんのかさ」佐野洋子文／講談社

（英語教育講座・図書館運営委員会委員）

■　将来、自分で調理する時に

野崎洋光『おいしい・かんたん和食大好き！：定番の和食 110 レシピ』（成美堂出版）

庄子　博之

この本は中学部や高等部の学習で大活躍です。中学部の生活単元学習「学校に泊まろう」は，生徒が自分たちで立てた計画のもと，活動に見通しを持ち，学習を主体的に進めていこうとする態度を身につけ，身辺自立の技能を高めることをねらいにしています。特別支援学校の校庭の隅にある平屋づくりの生活訓練棟に一泊して生活する中で，荷物の整理，衣類の始末，ふとん敷き，レクリェーションの計画や準備，食料の購入，食事作りなどに取り組みます。食事作りでは，自分の作りたいおかずをインターネットや図書室の本で調べます。そのような時に，生徒は写真で分かりやすく調理法を示してあるこの本を手に取り，作り方や材料を調べています。

高等部「職業・家庭」（生活訓練棟で）

材料を買うのも大事な学習です。品物がどこに置いてあるのか分からない時は，店員さんに尋ねます。聞き方も学んでいきます。みんなで協力して調べたり，作ったりした料理の味は格別のようです。将来，家庭から離れ自分で調理する時に，もう一度手にしてもらいたい本です。

※「おいしい・かんたん和食大好き！：定番の和食 110 レシピ」
野崎洋光著／成美堂出版

（附属特別支援学校教諭）

■　絵本を読んで英語で表現する授業

佐藤　　倫子

嬉しいときの「ぎゅっ」、悲しいときの「ぎゅっ」、ありがとうの「ぎゅっ」・・・。２学年英語科で扱った絵本『ＨＵＧ』を紹介します。これは、０歳児からを対象とした絵本で、英語で書かれた絵本といっても本文はなく、せりふは"HUG", "BOBO", "MUMMY"の３語しかありません。小猿のボボが、色々な動物たちのＨＵＧする姿を見て、母親に出会うまでのお話です。絵は優しい色合いで描かれ、とても温かい印象を与えます。原書のタイトルが『ＨＵＧ』であるのに対して、翻訳版では『ぎゅっ』という表現が選ばれています。

授業は、次のように構成しました。絵本をスクリーンに映して、ＡＬＴが簡単な英語で絵を描写する文を聞きながら物語を読みます。ボボが寂しそうな顔をした場面で絵を止め、なぜボボは寂しそうな顔をしているのか、また、お母さんに会えた後、ボボはどんなことを学んだのか、その理由を英文で書きました。『ＨＵＧ』の温かさや触れ合うことの嬉しさだけではなく、寂しそうなボボを助けようとする仲間の大切さについても気付くことのできる絵本です。授業後は、「絵本を英語で読んだのは初めてだったので楽しかった」、「ボボの気持ちを英語で表現するのが大変だった」などの声が聞かれ、絵本を見て表現の工夫をしようという意欲が高まりました。

日本人にとって hug は馴染みの薄い文化といえますが、ただ英語の文を書くだけではなく、絵本のもつ温かさという、本文に表れない部分を読み取ることで、教材が生徒の心に残るものとなったと思います。

※「ぎゅっ」ジェズ・オールバラ作・絵／徳間書店
Jes Alborough, HUG (Candlewick Press)

（附属中学校教諭）

■　暖かい心の届くこの一冊

『あたたかいおくりもの』（福音館書店）

佐藤　　葵

暖かな場所、大好きな人、たくさんの笑顔、それがクリスマスに対して抱く私のイメージです。そこには贈り物があり、想いがあります。「選んだ贈り物、気に入ってくれるかな」という、贈り物をするときのわくわくした気持ち。贈り物を受け取って、自分のことを思って選んでくれたその姿を思い描く、うれしく、暖かな気持ち。『あたたかいおくりもの』には、そうした贈る気持ち、贈られる気持ちが詰まっています。

寒い冬を外で過ごす森の木のために、森の動物は一生懸命、セーターを編みます。動物が作るセーターは、古い膝掛けをほどいたもの、短い毛糸を結んでつなぎ合わせたもの、綿を混ぜて水玉模様にしたものなど。想いが籠もったセーターは、どれもこれもふわふわとして暖かそう。セーターを着せてもらった森の木の周りは、雪の中であるにもかかわらず、そこだけ陽だまりのような暖かさがあるのです。

この絵本を読むと贈り物がしたくなります。相手を思う、贈り物の暖かさが伝わってくるからです。大好きな人に喜んで欲しい、心の中でそう想う時間は楽しいもの。その先に、大好きな人のうれしそうな笑顔という素敵な「贈り物」が待っているからです。

※「あたたかいおくりもの」たるいし　まこ作／福音館書店

（教育臨床専攻２年）

■　新刊紹介

木村由利子・文／スズキコージ・絵『はらぺこねこ』（小学館）

繰り返しは絵本の大事な要素の一つです。ねこがきつねを食べ、野うさぎを食べ、おおかみを食べ、くまを食べる、そのときの言い回しが同じになっています。違いがあるとすれば、食べる度に一つ一つ多くなっていく「積み重ね」、マザー・グースから、“This is the house that Jack built.”をその代表としてあげることのできるものです。ここではそこに驚きが加わります。小さなねこが自分よりはるかに大きなものを飲み込む驚き、驚きという絵本の持つもう一つ大事な要素です。食べる度に大きさを増していくねこは、結婚式の行列を食べ、お葬式の行列を食べる。そこまではいいとして、お月さまやお日さままでを食べてしまうのです。

うちだりさこ・再話／スズキコージ・絵『ひつじかいとうさぎ』（福音館書店）は同じ積み重ねの上にできています。違っているのは、『ひつじかいとうさぎ』の場合、積み上げていったものが中間点でひっくり返り、逃げたうさぎはひつじかいのところへと戻ってくるのに対して、ここでは真ん中が折り返し点になっていないことです。お月さまを食べても止まらない、お日さまを食べてもまだ止まらない。お日さまを食べたところでねこのお腹は溶け、食べたもの全部が飛び出してくると予想していたにもかかわらずです。ビョルクリット『はらぺこガズラー』（ほるぷ出版）のはらぺこねこなら、お日さまを食べたところで「バッカーン！」と破裂して終わるのです。

巨大にふくれ上がったそのねこがやぎを食べようとします。どうして最後がやぎなのかを考えるには、これが北欧の昔話に基づくものという事実、そして同じく北欧の昔話に基づくマーシャ・ブラウン『三びきのやぎのがらがらどん』（福音館書店）での、トロルをやっつけたやぎに目を向けることが必要になります。お日さまをのみ込んだねこをやっつけたやぎは、お日さまより強い、とすれば、北欧の神話や昔話にあって、やぎは特別の位置を占めていると思われるからです。

（藤田　　博）

発行：宮城教育大学附属図書館